

組曲「都筑風土記」4

やまた ふ じ ふゆ
山田富士の冬

加羅古呂庵 一泉

2020.6.20 作曲

The image shows a musical score for five instruments: two flutes (尺八 I and II), two shamisen (箏 I and II), and a koto (十七絃). The score is written in Western staff notation with a key signature of one flat (B-flat) and a common time signature (C). The flute parts are simple, with notes for 'ハ' (ha) and 'ビ' (bi). The shamisen and koto parts are more complex, featuring a sequence of notes corresponding to the scale: 二 (ni), 三 (san), 五 (go), 七 (shichi), 九 (ku), 斗 (to), 為 (mi), 巾 (hin). Above the shamisen and koto staves, there are annotations: '楽調子 一をE' (Musical mode: one on E) and '六・斗調弦替えあり' (Six・to tuning change available). The koto part includes a fretting diagram at the bottom with numbers 2, 3, 5, 7, 9, 1, 3, 5, 7.

運指、奏法については、適宜工夫していただいでけっこうです。

自然が豊かで歴史のある横浜市都筑区の風景をテーマとして、「古民家の春」「大塚・歳勝土の夏」「月出松の秋」「山田富士の冬」「都筑の風」の5曲を作曲しました。いわば「都筑風土記」として、組曲のように5曲通して演奏してもいいですし、演奏する機会・場所に依じて、1～2曲ランダムに演奏してもいいでしょう。

山田富士の冬

横浜市営地下鉄グリーンラインの北山田駅からほど近いところに「山田富士公園」があります。

江戸時代中頃になると、神社仏閣への参詣が大衆化し、多くの庶民が旅に出るようになりました。「講」を組んでお金を集め、代表者数名が富士山や大山に参詣することが行われました。

「富士講」は、宝暦年間（1751～64年）以来、関東一円に広がりましたが、「富士塚」と呼ばれる人造の富士山をつくり、富士山を遥拝することも広まりました。都筑区内には、「山田富士」「川和富士」「池辺富士（元富士）」「池辺富士（新富士）」の4つの富士塚があります。

「山田富士」は、文政年間（1818～29年）には築かれていたといえます。30mほどの高さがありますが、高い建物がなかった当時としては、かなり遠くまで見通せたことでしょう。

「山田富士」は、「山田富士公園」の一角にあり、木々におおわれているため見過ごししてしまいがちですが、登山道を登っていくとしだいに富士が姿を現してきます。頂上に立つとそれは別世界で、新横浜や丹沢・大山の山なみが見渡せます。足元の幹線道路やスーパーマーケット、娯楽施設といった日常の風景が雑然と感じられ、そこから超越した気分になってきます。

なお、「山田」は、かつての「山田郷」もしくは「矢俣郷」からきているので、「やまだ」ではなく「やまた」と読みます。

74	69	64	59

54	49	43	38

114	109	104	99

94	89	84	79

